

引きこもり症例に対する安定通所に向けた支援と職場定着支援

～球技グループがもたらすリカバリー～

○植木 達也 1) 北島 朝子 2) 太田 秀造 3) 太田 健介 3)

1) 作業療法士 2) 看護師 3) 医師

医療法人耕仁会 札幌太田病院 2階デイケア課

【はじめに】近年、精神科デイケア(以下 DC)で行われる運動がレクリエーションとしての機能から、社会参加を目的とした競技スポーツへと広がりを見せており、当 DC でも各種球技プログラムを行っている。今回、うつ状態から引きこもりとなった症例に対する球技を軸とした安定通所に向けた支援と、職場定着に至るまでの経過を報告する。

【症例紹介】A氏、20代男性、うつ状態。趣味：ゲーム。特技：球技。

現病歴：x-2年、店舗異動を契機に仕事を辞め、引きこもりとなる。X-1年に当科初診、x年より通所を開始する。

【治療経過】(1)x年2月、「人が多くていられない」と訴え、見学時に関心を示したフットサルのみ体験参加を開始する。(2)x年7月の参加を最後に欠席が続き、利用者帰宅後の面談を提案して関わりを継続するが音信不通となり、中断する。(3)x+2年2月、通所を再開、「人の視線が怖い」とマスクとバンダナで常に顔を隠す。大会優勝を目指す利用者から球技に誘われて参加し、週2日で通所を継続する。(4)球技の技術向上のため、通所日数を増やす。顔を隠さず、自発的交流が増える。x+2年11月、高い技術と真面目な練習態度からキャプテンに任命され、通所を週5日とする。「出すぎてしまった」と落ち込み欠席が続くと、自ら相談して通所を再開する。その後、各種球技の優勝に貢献する。(5)就職に向けた相談あり、就労プログラムや適性検査の他、ハローワーク連携事業の対象として支援を開始する。チームで検討を重ね、ゲームを扱う企業に応募して採用が決まる。企業訪問し、本人を交えた会議を行う。現在は5日/週、4時間/日で就労を継続している。

【評価】月(通所回数):x年3(3) x+1年3(0) x+2年3(4) x+3年3(13) x+3年8(22)

【考察】気分障害に対する運動の有効性は既に先行研究で述べられており¹、A氏においても球技による運動効果が働き、抑うつ症状が改善されたと考えられる。

通所継続に向けた動機付けの要因として、大会優勝を目指す利用者からの声かけに始まり、A氏自身も技術向上を求めたことがあげられる。球技に参加する当事者の目的調査では「大会で優勝したい」という回答が多数を占めていることから²、勝敗を重視したプログラム展開は治療者の工夫を必須として、安定通所への効果があると言える。

球技を支援の中心として職業準備性が整えられていたことで、就職という新たな目標を持って間もなく支援が開始され、チーム支援による円滑な就労移行と職場定着に至り、結果、A氏の自己実現に繋がったと考えられる。しかし、中断から再通所に至るまでの支援の途切れはDCの問題点として、今後の課題としていく。

¹ 内田直 精神科疾患の運動療法,総合リハビリテーション,vol44(11),p963,2016

² 大井崇弘 精神障害者に期待されるスポーツの必要性和課題,順天堂スポーツ科学研究,vol6(1)p34,2014